ヨシト

「おい、アツシ。ちょっと。」
ヨシトと昨日見たテレビの話をしていると、コウジがぼくを呼んだ。話を途中で切り上げて、コウジの方へ行くぼくを、ヨシトは笑顔で見ている。

ヨシトはぼくの幼なじみで、同じ小学校からこの中学校に来た。小学校のころから、ヨシトはあまりしゃべらない。ぼくとは、けっこう自分の好きなことなんかをよく話すのだが、学級の友達に話しかけることはほとんどなかったし、周りに合わすこととか、その場の雰囲気を察して振る舞うことが苦手だった。そのせいもあるのか、割といつも一人でいることが多かったが、いつもニコニコと笑顔を絶やさないヨシトを、うちのお母さんなんかは小さな頃から可愛がっていた。
何事にもマイペースなヨシトは、みんなを待たせてしまうこともよくあって、ヨシトのお母さんは、
「アツシ君。ヨシト、ちゃんとやってる？」
とよくぼくに聞いたものだ。小さいころから知っているぼくを、頼りにしてくれているのだと思うとうれしくなった。
低学年のころは、ヨシトのお母さんの仕事が忙しいせいもあって、よくうちにヨシトを泊めて兄弟のように過ごしてきた。でも、高学年くらいになると、ぼくも他の友達と遊ぶことが増え、ヨシトと遊ぶことは減っていった。ヨシトは一人でいることが多かったように思うが、それを苦にするようでもなく、誰かに声をかけられたら、その子と一緒にいた。ヨシトは自転車が好きで、放課後にぼくが友達と遊んでいると、自転車に乗って一人であちこち走り回っている姿を見かけたものだった。
そのころから、何となく学級のみんなが、表立ってこそ言わなかったが、陰でヨシトのことをかわってるだとか空気の読めないやつだなんて言うようになった。
中学校に入ると、ヨシトはさらに周囲から浮いた存在となった。学級でも一人でいることが多く、しゃべる友達はぼくだけだった。

「アツシ、お前、ヨシトと仲がいいんだろ。」
「え、うん。まあな。」
「あいつ、かわってるよな。女子なんかよく言ってるぜ。ニヤニヤして何考えてるか分からないって。話にも入ってこないし、入っても空気読めないし。」
いくら何でもそれはないだろ。ヨシトが何か人に嫌がられるようなことをしたのか。ぼくはそう言いたかった。でも、言えなかった。
ヨシトがいつもの笑顔でこっちに来た。コウジとタカフミは顔を見合わせて向こうへ行った。
「ねえねえ、アツシ君。昨日テレビ、何見た？」
「え、テレビか。いや、昨日は勉強してて見てないな。」
バラエティ番組を母さんと大笑いしながら見てたことを思い出しながら、ぼくはついそう言ってしまった。
「そう。ぼくはね……。」
「ヨシト、ちょっと用事思い出した。またな。」
そう言って、ぼくは廊下に出て行った。何だか教室中のみんながぼくたちの方を見ているような気がしたのだ。

その日から、改めてヨシトへの学級のみんなの冷ややかな視線が、ぼくに強く

感じられるようになった。あるときは、授業中に、みんなに紙が回されていた。ぼくのところに回ってきたそれを見ると、ヨシトのことが書いてある。ヨシトを見ると、何も知らず、いつものニコニコ顔で黒板を見ていた。周りのみんなはそんなヨシトを見てクスクス笑っている。ぼくは、回ってきた紙切れを握りしめた。

ある日の放課後、部活を終え、コウジやタカフミと別れて家まで一人で歩いていたぼくは、道端でヨシトに出会った。ヨシトは自転車をとめてゴソゴソ何かやっている。

「ヨシト、どうしたの。」

「あ、アツシ君。チェーンが外れたから直してるんだけど……。」

見ると、手は油で真っ黒。拾った棒切れで、外れたチェーンをかけようとしているようだ。

「もう少しなんだけど。なかなかうまくかからなくて……。」

「ヨシト、もうその自転車ずいぶん古くなったし、小さいだろ。新しい自転車買ってもらえよ。そうすれば簡単にチェーンが外れたりしないしさ。」

ダサい自転車とか、今度は自転車のことでバカにされたりするかもしれない。そう思ってぼくは言った。するとヨシトはいつもの笑顔で言った。

「うん。でもさ、この自転車、五年生の誕生日にお母さんが買ってくれたんだ。喜んでるぼく見て、お母さんの方がうれしそうだったんだよね。新しいのに乗りたいと思うこともあるけど、この自転車が好きだから。確かにずいぶんボロくなったけど、ちゃんと直せばまだまだ走るよ。」

その言葉に、ぼくは胸をつかれた。みんな新しいのを買ってもらってる、小さな自転車なんか恥ずかしくて乗れない—そう文句を言って、中学校に入ってから新しい自転車を買ってもらったぼくだった。買ってもらったものを大切にしているヨシト。わがままを言わないヨシト。小さいころから、近くの工場へ働きに行っていたお母さんの様子を、ヨシトはいつも見ていたからかな。ぼくは自分のことばかり。家族のこととか仕事のことなんて考えてこなかった。あまりしゃべらないヨシトは、自分よりずっと家族思いで大人だ—。

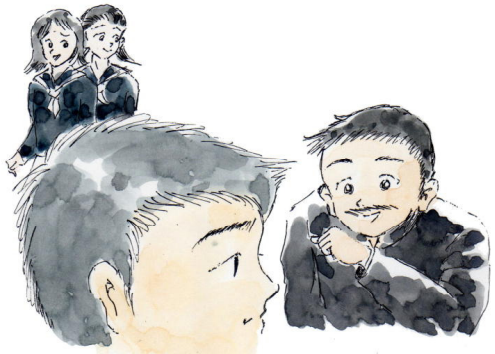
「アツシ君、直ったよ。」

ふと見ると、ヨシトを見ながら二人の女子が顔を見合わせてクスクス笑いながら通り過ぎていった。ぼくは、腹の底に何か熱い塊が生まれたことを感じた。

ヨシトがうれしそうに顔を上げた。油の付いた手で鼻の下をこすったヨシトの顔には、見事なヒゲが生えていた。

「ヨシト、ティッシュ。」

ヒゲを生やした顔でニコニコ笑うヨシトにティッシュを渡しながら、ぼくはしっかりと顔を上げた。



○　ぼくはなぜ話しかけてきたヨシトにうそをついたのか。

○　笑うみんなを見て、アツシがたまらなくなったのはなぜか。

○　熱い塊とは何か。また、しっかりと顔を上げたアツシは何を思っていたか。